

# 天神山周辺の原始・古代の遺跡

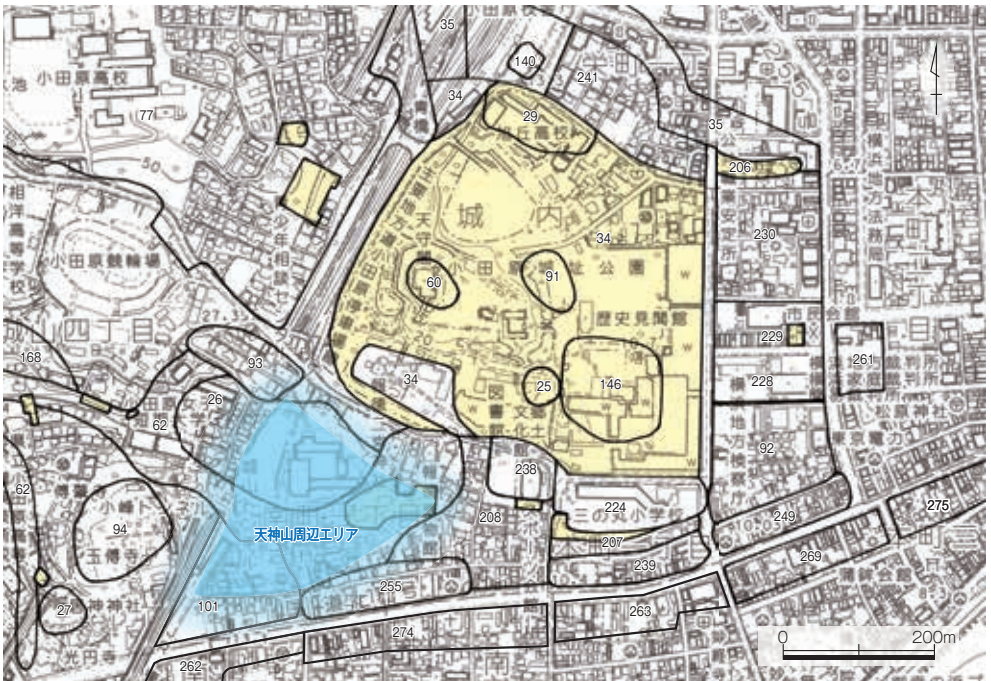


# 例 言

- 1 本書は、散策しながら遺跡が学べるガイドブック「小田原の遺跡探訪シリーズ」として作成しました。今回は第9号として、小田原市南町一丁目ほかに所在する遺跡群を取り上げました。
- 2 本書の刊行は、平成25年度国庫補助事業である「地域の特性を活かした史跡等総合活用支援推進事業」の一環として行いました。
- 3 本書の作成に関しては、以下の諸氏・諸機関からご指導・ご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。(敬称略・順不同)

岡本孝之、戸田哲也・相原俊夫(株式会社玉川文化財研究所)、田尾誠敏(東海大学)、明治大学博物館、株式会社玉川文化財研究所、神奈川県教育委員会

- 4 本書は、小田原市文化財課 渡辺千尋が担当となり作成しました。第V章を同課 藤掛泰尚が執筆し、その他を渡辺が執筆しました。編集は渡辺が行い、同課大島慎一・山口剛志・佐々木健策・土屋了介・吉田千沙子・土屋健作・三戸芽が補佐しました。また、図版の作成には太田麻紗美・海野みね子・大村さえ子・杉山弘美の協力を得ました。



第1図 天神山と周辺の遺跡(1/10,000)(数字は遺跡番号、黄色は国指定史跡)

[表紙] 天神山周辺の航空写真(小林ほか2001、玉川文化財研究所提供)

[裏表紙] 天神山出土石戈(明治大学博物館蔵、岡本孝之氏撮影)

# I 天神山周辺の環境と発掘調査

## 1 山角天神社とその沿革

小田原市の主要幹線道路である国道1号線から国道135号線が分岐する早川口交差点。そこから北東に220mほど、国道1号線から1本北側の閑静な路地に面した石段を上ると、<sup>やまかくてんじんしゃ</sup>山角天神社があります(写真1)。

<sup>すがわらのみちざね</sup>菅原道真<sup>さいじん</sup>を祭神とする神社で、創建年代は不明ですが、<sup>えいろく</sup>永禄4年(1561)には、<sup>いとく</sup>威徳<sup>さんちようきよういんさんこうじ</sup>山長教院三光寺という寺院を天神社の別当寺(神社を管理するために置かれた寺)として、<sup>しゅうざん</sup>僧秀山<sup>ちゅうこう</sup>が中興したといわれています。社の境内には、永禄4年に北条氏康が文運興隆祈願のために天神社を祀った時、三光寺に<sup>まつ</sup>奉納した<sup>ほうのう</sup>画軸と考えられている市指定文化財の「菅原道真画像」が納められています。

このほか境内には、<sup>ばしやう</sup>芭蕉句碑<sup>うりゅう</sup>や<sup>きのかるんどきょうか</sup>瓜生海軍大将之像、<sup>そときち</sup>紀軽人狂歌碑があります。瓜生海軍大将とは、日露戦争で活躍し、その後海軍大将となった<sup>そときち</sup>瓜生外吉(1857-1937)のことです。瓜生は板橋に別荘を設けた<sup>どんあう</sup>益田孝(鈍翁)の義弟にあたり、瓜生自身は、<sup>うりゅう</sup>山角天神社の西側に別荘を設けました。天神社から西側に75mの場所にある坂道は<sup>ざか</sup>瓜生坂と呼ばれ、当時がしのばれます。

山角天神社の境内から海側を眺めると、とても見晴らしが良い場所にあることが分かります。天神社の境内は国道1号線から10m以上も高く、標高は約23mです。天神社周辺は、標高20～30mほどの東側に伸びた丘陵が広がり、天神山と呼ばれています。天神山の名は江戸時代中頃に書かれた<sup>そうちゅうざっし</sup>「相中雑誌」に初めて見られます。

本書では、この天神山と呼ばれる丘陵部とその周囲の低地部の遺跡のうち、縄文時代～奈良・平安時代を中心にご紹介していきます。



写真1 山角天神社

## 2 天神山周辺の自然環境

小田原市、南足柄市と箱根町の市町境には、北西側から明神ヶ岳(1169m)、明星ヶ岳(924m)、塔ノ峰(566m)が連なります。これらは、箱根火山の中央火口丘をとりまく外輪山の北東側に位置し、東側は緩やかな斜面を作り出しています。東側に張り出した斜面地は、小田原市域では、久野や荻窪に丘陵部として伸びてきています。このうち、久野諏訪ノ原丘陵には、遺跡探訪シリーズ2でご紹介したように、縄文時代の大集落や古墳群が広がり、遺跡の宝庫となっています。

荻窪周辺に伸びてきた丘陵は、先端部で大きく3つに分かれ、小田原駅周辺の市街地へと伸びています。北側は谷津から城山一丁目の大稲荷神社周辺へ、真ん中は県立小田原高等学校の位置する八幡山から小田原城本丸へと伸びています。そして、南側が天神山周辺の丘陵にあたり、清閑亭周辺へと伸びています。

本書では、JR 東海道本線が通る小峰トンネル、県道73号線が通る城山トンネル周辺から東側を主な対象エリアとしました。小田原女子短期大学周辺では、標高約48m



写真2 天神山の丘陵部と御組長屋遺跡(南から)(玉川文化財研究所提供)

あった丘陵は、東に向かうにつれ徐々に標高が下がり、清閑亭の東側で標高12mほどの低地部へつながっています。南側は国道1号線の走る海岸平野が広がり、北側は同じく丘陵の先端部である小田原城本丸周辺との間に谷地形が入り、市道0087号線が走っています。天神山周辺は、三方を低地部に囲まれ、そこに突き出た半島のような地形をしています(写真2)。

### 3 調査のあゆみ

天神山周辺で遺跡の存在が広く周知されることとなったのは、昭和36年(1961)の旧県立小田原城内高等学校(旧城内高校)の建設工事の時でした。残念ながらこの時には発掘調査が行われませんでした。縄文時代中・後期の土器、石器が採集されています。その後、昭和63年(1988)2月に旧城内高校外周の擁壁補強工事の際、露出した崖面から縄文土器が見つかり、緊急で発掘調査が実施されました。2つの調査区合わせて35㎡の小規模な調査ながら、縄文時代の石囲炉を天神山周辺で初めて検出するなどの成果を挙げています(天神山遺跡第Ⅰ地点)。

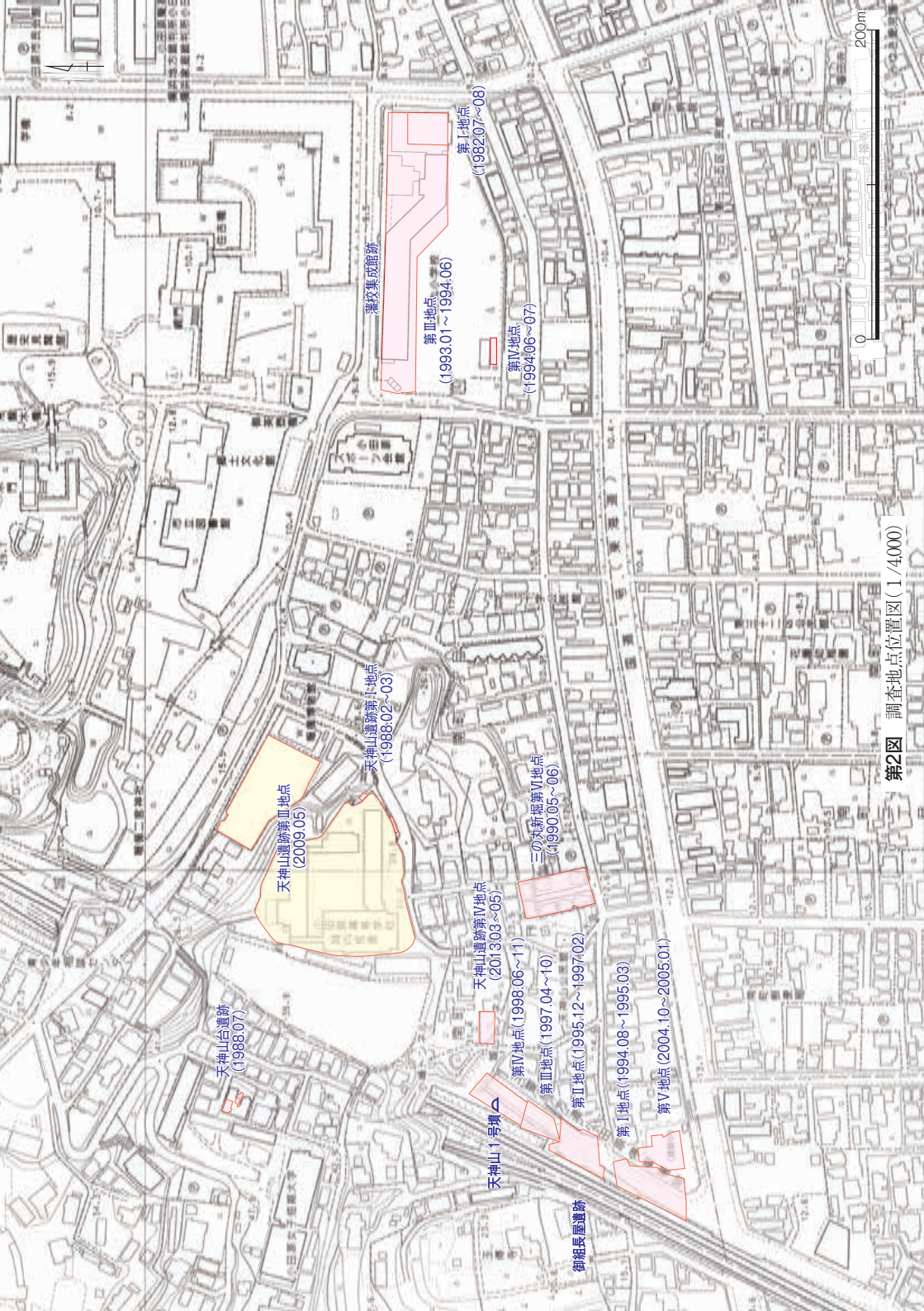
その後、旧城内高校地内では、平成21年(2009)5月に神奈川県教育委員会が試掘調査を実施しています。校舎が建っている部分でも床下に遺跡が残っていることが確認され、多量の縄文土器が出土しました(天神山遺跡第Ⅲ地点)。

昭和63年(1988)は、旧城内高校の西側に位置する天神山台遺跡の発掘調査も7月に行われ、縄文時代の遺跡の広がりが確認されています。

平成6年(1994)8月～平成10年(1998)11月には、都市計画道路小田原早川線街路整備事業に伴い、断続的に発掘調査が行われました。この御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点の調査は、丘陵部から南側の低地部を縦断するように調査が行われ、遺跡の広がりや土地利用の変化を考える上で、重要な調査となりました。平成16年(2004)10月～平成17年(2005)1月には、小田原消防署南分署建設に伴い、低地部の隣接地点で調査が行われています(御組長屋遺跡第Ⅴ地点)。

近年では、宅地造成工事に伴い、平成25年(2013)3月～5月に天神山遺跡第Ⅳ地点の本格調査が行われています。縄文時代後期の集落跡が主に検出されました。天神山遺跡第Ⅰ地点と御組長屋遺跡の中間地点にあたり、遺構の展開を考える上で、重要な成果となりました。

このほかにも天神山周辺では、本書で詳しくは取り上げませんが、小田原城三の丸新堀の調査や中・近世の遺構・遺物を検出している調査が行われています。



天神山遺跡  
(1988.07)

天神山遺跡第II地点  
(2009.05)

天神山遺跡第I地点  
(1988.02~03)

第II地点  
(1993.01~1994.06)

第I地点  
(1982.07~08)

第IV地点  
(1994.06~07)

天神山遺跡第IV地点  
(2013.03~05)

第IV地点(1998.06~11)

三の丸新堀第V地点  
(1990.05~06)

第III地点(1997.04~10)

第V地点(1995.12~1997.02)

第I地点(1994.08~1995.03)

第V地点(2004.10~2005.01)

藩校集成館跡

御組長屋遺跡

第2図 調査地点位置図(1/4000)



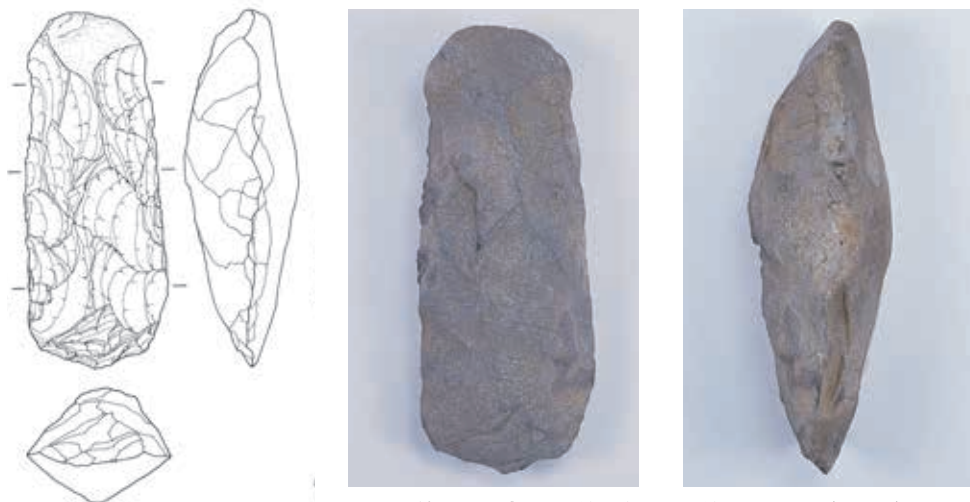
## Ⅱ 丘陵と谷戸に広がる縄文集落

### 1 神子柴型石器の出土（縄文時代草創期）

現在までに天神山周辺では、旧石器時代の人びとの生活の痕跡は見つかっていません。天神山よりも北側の丘陵上に位置する谷津山神遺跡<sup>や つ やま の か み</sup>や史跡小田原城跡御用米曲輪<sup>お だ わ ら じ ょ う せ き こ う よ う ま い く る わ</sup>の調査では、石器や石器の素材となる剥片<sup>はくへん</sup>を取り出した石核<sup>せつかく</sup>が見つかっているのです、似たような立地環境にある天神山周辺でも、将来、旧石器時代の石器が発見されるかもしれません。

氷河期が終わり、気候が温暖化する中で、縄文時代が始まります。その後、1万年以上続く縄文時代は、土器研究の成果から草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の6期に区分されています。天神山台遺跡<sup>そ う そ う き</sup>では、約15,000年前から始まる縄文時代草創期の中でも、最初期にあたる神子柴型石器<sup>み こ し ば が た</sup>と呼ばれるタイプの石器が出土していることが注目されます(第3図・写真3)。出土した石器は<sup>きょくぶ ませいせきふ</sup>局部磨製石斧で、長さ14.1cm、幅5.5cm、厚さ4.4cm、重さ399gと重量感があります。

神子柴型石器は、長野県神子柴遺跡から発見された石器群を基準資料とすることからそのように呼ばれ、同じく青森県長者久保遺跡<sup>ちやうじやくほ</sup>出土の石器群とともに、旧石器時代のものとは異なる特徴をもつ石器群であることから、長者久保・神子柴系石器群と呼ば



第3図・写真3 天神山台遺跡の神子柴型石器(図:1/3)

れ、旧石器時代の終わりから縄文時代の始まりを考える重要な資料として、研究者に注目されてきました。

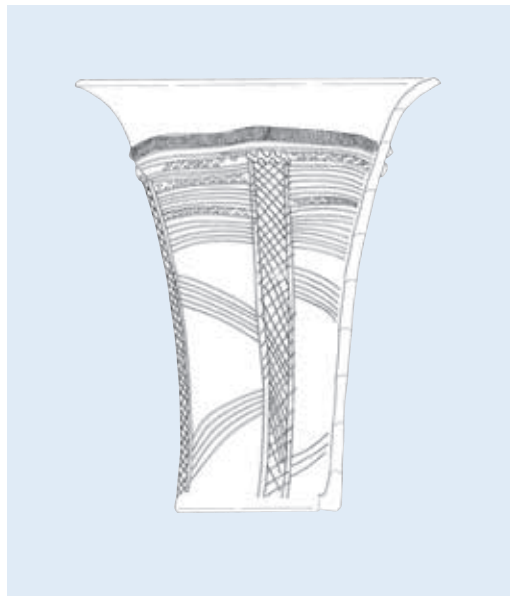
現在では、長者久保・神子柴系石器群に土器が伴って出土した事例も増加し、土器を製作・使用し始めた時代である縄文時代の最初期の石器群に位置付けられています。極東ロシアなどのユーラシア大陸に起源を持つと考えられており、縄文文化の起源を解明するうえでも注目される資料です。

## 2 集落の萌芽（縄文時代前期～中期前葉）

天神山周辺では、縄文時代早期、前期の生活の痕跡は、発掘調査ではあまり明確になっていません。この時期は、現在よりも気候が温暖化し、ピークには平均気温が2～5℃程度高かったと考えられています。それに伴い海水面が2～3m上昇し、海岸線が現在よりも内陸部に浸入する縄文海進<sup>じょうもんかいしん</sup>と呼ばれる出来事があったと考えられています。

やがて、今から約5,500年前の縄文時代中期になると人びとの生活の痕跡が再び見つかるようになります。天神山遺跡第I地点では、状態はあまり良くありませんでしたが、竪穴住居跡が見つかっています。直径6mほどの住居跡の真ん中には、石を囲って構築した石囲炉が検出されました。炉は食べ物の調理に使用するだけでなく、竪穴住居内の暖房や乾燥、照明など、多くの役割を果たす施設でした。

天神山遺跡第I地点の石囲炉の周辺の床には土器や石器のほかに、多量の黒曜石の破片が散っていました。竪穴住居の中で、石器作りをしていたのでしょうか。出土した土器から中期初頭の五領ヶ台式<sup>ごりょうがたい</sup>の住居跡と考えられています。ほかにも五領ヶ台式土器が多く見つかることから、縄文時代中期の初め頃に、人びとが天神山周辺に定着し始めたことを物語っています（第4図）。



第4図 天神山遺跡第I地点出土五領ヶ台式土器  
(1/6) (小田原天神山遺跡発掘調査団1988)



### 3 集落の展開（縄文時代中期後半～後期）

天神山台遺跡では、縄文時代中期後半、加曽利E式・曾利式の段階の石囲炉が3基見つかりました(写真4・5)。もともとは、竪穴住居の内部に造られていたものと考えられます。縄文時代の炉には、地面を掘りくぼめたままの地床炉、底を打ち欠いた土器を床に埋め込んで使用した埋甕炉、埋甕の周りを河原石で囲んだ石囲埋甕炉などいくつかの形態がありました。石囲炉は縄文時代中期の炉の一般的な形態のひとつでした。

検出された炉は互いの位置が近く、周辺の柱穴も重なり合っていることから、それぞれの竪穴住居跡は同時に存在していたのではなく、複数の時期に渡って造られたことが想定されます。縄文時代中期後半には、天神山周辺に人びとが継続的に暮らし始めたといえます。

その後、集落の形成は約4,500年前の後期初頭は低調ですが、後期前半の堀之内式期になると、再び盛んになります。天神山遺跡第Ⅳ地点では、堀之内式期の住居跡が5軒見つかっています。床面に平らな石と玉石を敷き、外周に縁石をもった柄鏡形(敷石)住居も見つかっています(写真6)。



写真4 天神山台遺跡の調査(諏訪問ほか1994)



写真5 天神山台遺跡の石囲炉(諏訪問ほか1994)



写真6 天神山遺跡第Ⅳ地点の柄鏡形(敷石)住居跡(玉川文化財研究所提供)

#### 4 御組長屋遺跡の調査（縄文時代後期）

御組長屋遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点の調査は、都市計画道路小田原早川線の街路整備に伴って行われました。第Ⅰ地点と第Ⅱ地点の南側は、標高10～12mほどの低地部に、第Ⅱ地点中央～第Ⅳ地点にかけては、標高15～25mほどの丘陵の南側の縁辺部に位置しています。

縄文時代の遺跡は第Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点で見つかりました(第5図)。そのうち丘陵側に位置する第Ⅲ・Ⅳ地点では、<sup>たてあなじょう</sup>堅穴住居跡1軒、<sup>ど</sup>堅穴状遺構2基、土坑3基およびピット群が検出されました。遺物は<sup>じゅうさんぼだい</sup>前期末十三菩提式期～<sup>かそり</sup>後期中葉加曽利B1式期の土器や石器が出土しました。

検出された堅穴住居跡は、後期前葉堀之内1式期のもので、南側がすでに削られてしまっていたましたが、本来は柄鏡形の住居跡であったと推定されています。天神山遺跡第Ⅳ地点からの集落の広がりが考えられます。堅穴状遺構や土坑・ピット群は、中期初頭五領ヶ台式～<sup>かつさか</sup>中期中葉勝坂式期の遺構でした。

一方、低地部の第Ⅱ地点の調査では、住居跡2軒、石垣状積石1箇所、土坑1基などが見つかりました。調査開始時にはこのような低い場所から縄文時代の遺跡が見つかるとは予想されおらず、関係者を驚かせました。



第5図 御組長屋遺跡の縄文時代遺構全体図  
(1/1,000) (小林ほか2001を改変)

それでは、第Ⅱ地点の成果を詳しく見ていきましょう。遺構は、第Ⅱ地点の南西側の低地部から密集して検出されました(第7図)。遺構の年代は、大きく後期前葉の堀之内1式期と後期中葉加曽利B1式期の2つに分けられます。

堀之内1式期は、土坑と砂利敷住居跡が検出されました。土坑には、底の部分に穴を開けた<sup>ふかぼちがた</sup>深鉢形土器が、逆さまに埋められていました(写真7・第6図)。このような土器は、屋外埋設土器と呼ばれ、埋葬施設のひとつと考えられています。

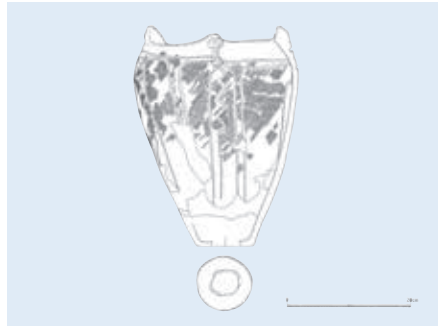
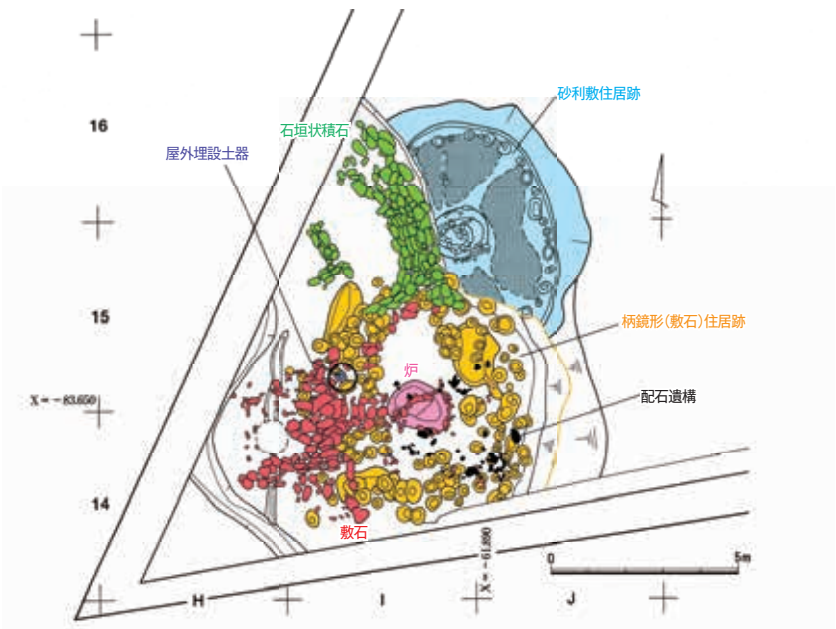


写真7 屋外埋設土器(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)

第6図 埋設されていた深鉢形土器(1/12)  
(小林ほか2001)



第7図 第Ⅱ地点遺構全体図(1/200)(小林ほか2001を改変)



写真8 砂利敷住居跡(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)

砂利敷住居跡は、加曾利B1式期の住居跡に南西側を壊され、全体の半分ほどが見つかりました(写真8)。住居の床に直径5~70mmの砂利が敷き詰められ、最大で12cmの厚さがありました。地震による地割れの影響で帯状に空白部分が見られましたが、本来は炉や柱穴部分を除き、全面的に砂利が敷き詰められていたようです。砂利敷住居跡は大変珍しく、全国的にも類例がほとんどありません。



写真9 柄鏡形(敷石)住居跡(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)

加曾利B1式期は、柄鏡形(敷石)住居跡と石垣状の積石、石を配置した配石遺構が検出されました。

柄鏡形(敷石)住居跡は、出入り口部分が外側に出っ張るため、上からみた住居の形が、柄鏡のような形をし、平たい河原石が床面に敷かれた住居跡です。中期後半~後期中葉の関東・中部地方を中心に見られる住居跡で、一般的な住居とする説と、祭祀に関わるような特殊な家屋とする説が存在しています。



写真10 石垣状積石(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)

御組長屋遺跡の柄鏡形(敷石)住居跡は、周辺で住居跡が見つかっていないことから、単独で低地部に造られたと考えられます(写真9)。

敷石には、根府川石などの平らな河原石のほかに、石棒や石錘などの石器も石材として使用されていました。根

府川石は、平らに割れやすい性質を持ち、現代でも石碑などに使われています。敷石の表面は、焼けて赤く変色しているものやひび割れているものがありました。南側の敷石の上には厚さ5~10cmの焼土しょうども検出され、敷石の上で意図的な火の使用が行われたようです。また、住居の右奥にあたる南東隅には河原石を縦長に立てた立石りっせきがありました。

柄鏡形(敷石)住居跡からは、土器や石器が見つかっています。石器は石鏃せきぞく、磨石すりいし、石棒など213点が見つかりました(写真11)。網のおもりなどに使用されたと考えられる石錘せきすいが大量に見つかったことが特徴的で、海に近い遺跡の立地を反映しているかもしれません(写真12)。

石垣状積石は、柄鏡形(敷石)住居の北壁に沿うように見付き、南東端は住居の敷石の上に約10cmの土を挟んで構築されていました(写真10)。石積みは最大で5段残り、横長に石を使い、間詰めまづめに小石を用いるなど、丁寧な作りで、上面からは石棒の破片と残りの良い深鉢形土器が見つかりました(写真13)。柄鏡形(敷石)住居の廃絶に伴い、儀礼行為として構築された可能性が指摘されています。



写真11 柄鏡形(敷石)住居跡出土の石器  
(石鏃・石錘・楔形石器・石皿・磨石・  
敲石・凹石・蜂巢石・石棒)

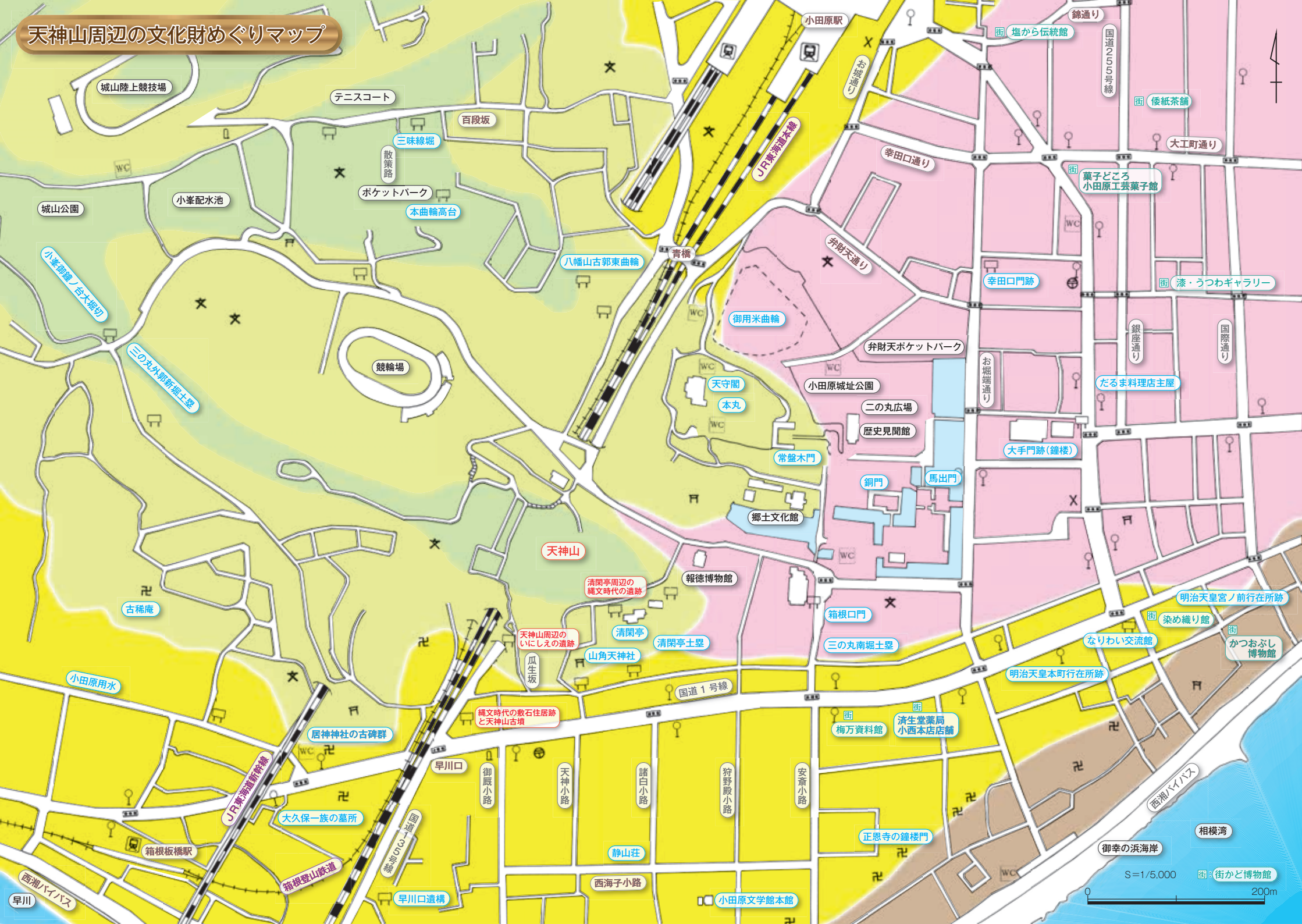


写真12 柄鏡形(敷石)住居跡出土の石錘



写真13 石垣状積石出土の加曾利B1式土器

# 天神山周辺の文化財めぐりマップ



城山上競技場

テニスコート

百段坂

三味線堀

散策路

ポケットパーク

本曲輪高台

城山公園

小峯配水池

小峯御鐘ノ台大堀切

三の丸外郭新堀土塁

競輪場

八幡山古郭東曲輪

JR東海道本線

御用米曲輪

天守閣

本丸

弁財天ポケットパーク

小田原城址公園

二の丸広場

歴史見聞館

常盤木門

銅門

馬出門

郷土文化館

天神山

清閑亭周辺の縄文時代の遺跡

報徳博物館

清閑亭

清閑亭土塁

山角天神社

天神山周辺のいにしへの遺跡

瓜生坂

縄文時代の敷石住居跡と天神山古墳

居神社の古碑群

大久保一族の墓所

箱根板橋駅

JR東海道新幹線

箱根登山鉄道

早川口遺構

早川口

御殿小路

天神小路

諸白小路

狩野殿小路

安齋小路

静山荘

西海子小路

小田原文学館本館

正恩寺の鐘樓門

梅万資料館

済生堂薬局  
小西本店店舗

明治天皇本町行在所跡

御幸の浜海岸

相模湾

街かど博物館

S=1/5,000

200m

街 塩から伝統館

街 倭紙茶舗

街 大工町通り

街 菓子どころ  
小田原工芸菓子館

街 漆・うつわギャラリー

街 銀座通り

街 国際通り

街 だるま料理店主屋

街 大手門跡(鐘楼)

街 明治天皇宮ノ前行在所跡

街 染め織り館

街 かつおぶし  
博物館

街 なりわい交流館

# Ⅲ 弥生時代の住居と古墳の出現

## 1 弥生時代の住居跡（弥生時代後期）

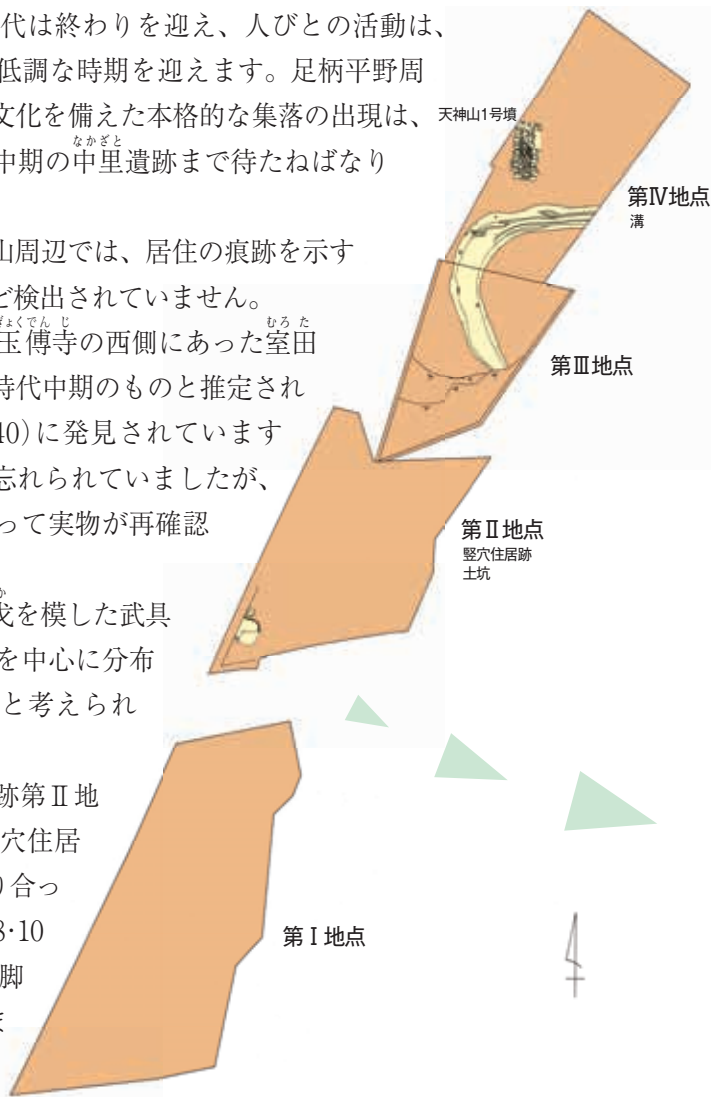
約2,400年前に縄文時代は終わりを迎え、人びとの活動は、市内全域を見渡しても低調な時期を迎えます。足柄平野周辺では、コメづくりの文化を備えた本格的な集落の出現は、約2,200年前の弥生時代中期の中里遺跡まで待たねばなりません。

弥生時代以降の天神山周辺では、居住の痕跡を示すような遺構は、ほとんど検出されていません。

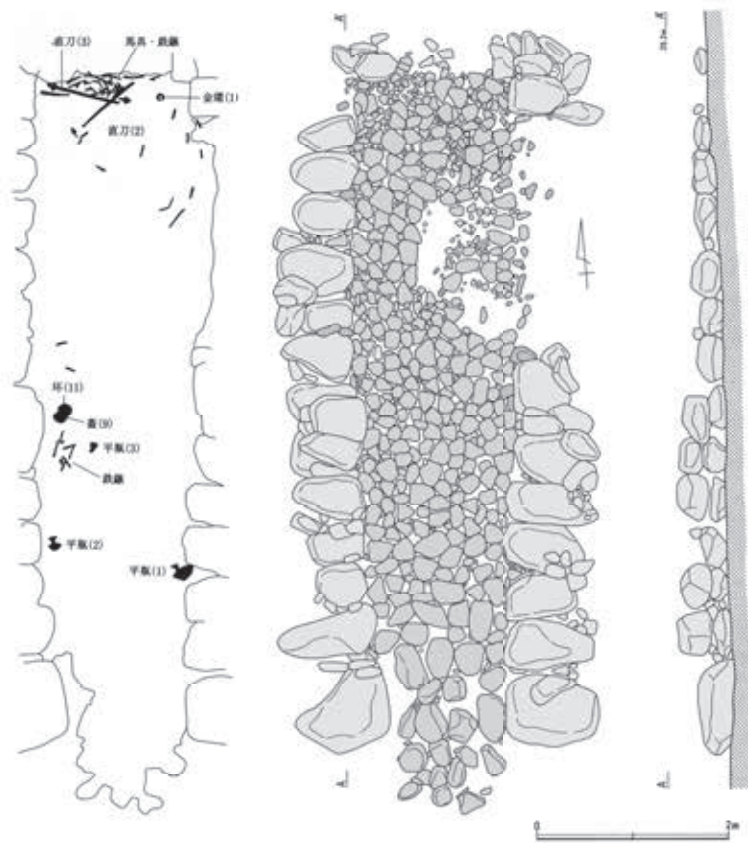
珍しい遺物として、玉傳寺の西側にあった室田義文別荘跡から、弥生時代中期のものと推定される石戈が昭和15年(1940)に発見されています(裏表紙)。長く存在が忘れられていましたが、近年、岡本孝之氏によって実物が再確認されました。

石戈は、青銅製の銅戈を模した武具で、弥生時代の西日本を中心に分布し、祭祀に用いられたと考えられています。

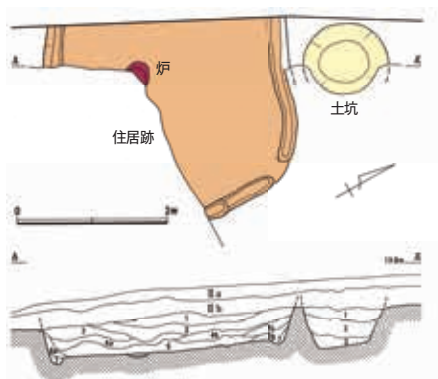
遺構は、御組長屋遺跡第Ⅱ地点の谷戸部で後期の竪穴住居跡1軒と土坑1基が隣り合っで見つかっています(第8・10図)。住居内からは、脚の部分に欠損していますが、残りの良い台付甕が出土しています(写真14)。



第8図 御組長屋遺跡の弥生・古墳時代遺構全体図 (1/1,000) (小林ほか2001を改変)



第9図 天神山1号墳(1/80)(小林ほか2001を改変)



第10図 弥生時代の住居跡と土坑(1/100)  
(小林ほか2001を改変)



写真14 住居跡出土の台付甕



## 2 天神山1号墳の調査（古墳時代後期）

古墳時代では、御組長屋遺跡第Ⅳ地点で検出され、天神山1号墳と命名された古墳の調査が注目されます(第8・9図)。

検出されたのは古墳の墳丘の中に造られた埋葬施設にあたる石室部分で、追葬可能な横穴式石室でした。中・近世の遺構によって破壊を受けていたため、墳丘はすでになく、石室の天井部や奥壁、通路部分の羨道などは失われた状態でした。

石室は、奥行き7.8m、幅1.8～1.9mの南北方向に細長い長方形で、入口は相模湾に臨む南側に設けられていました。石室の側壁は東側で1段、西側で最大2段残っていました。平均して40cm×70cm程度、入口部分では70cm×100cm程度の大きさの石材を用い、小口を石室内部に揃えて石室を構築していました。底面には20cm前後の丸い石が敷き詰められていました(写真15・16)。

古墳の外周を巡る周溝が検出されなかったため、墳丘の規模は残念ながら明らかになっていません。



写真15 天神山1号墳(小林ほか2001)(玉川文化財研究所提供)

天神山1号墳は、出土した須恵器から7世紀初めに造営されたと考えられます。周辺では、ほかに明確な古墳の検出事例はありませんが、この時期の古墳は単独で存在しているのではなく、複数基がまとまって古墳群を造っていることが一般的です。他の古墳は、中世以降の土地利用が活発であったために、墳丘が削られたり、石室の石材が転用されたりしていることが予想されます。

天神山周辺は、相模湾を一望できる絶好の立地にあり、地域の有力者の墓が群集していたことでしょう。古墳の周溝の可能性が考えられる溝が、御組長屋遺跡第Ⅲ・Ⅳ地点や天神山遺跡第Ⅳ地点で検出され、古墳の存在を示唆しています。

### 3 天神山1号墳の副葬品

天神山1号墳からは、須恵器、直刀、馬具、鉄斧、鉄鍬、金環、玉類などの副葬品が良好な状態で出土しました。

須恵器は、東海地方の湖西窯で生産された容器形の平瓶や提瓶、碗・皿状の坏が、石室の中央や入口付近から出土しました(写真17・18)。

直刀は刃先を西側にして、4点が奥壁側で出土しました(写真19~21)。そのうちの1点は、金銅装具が装着



写真16 石室西側側壁・礫床(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)



写真17 平瓶出土状態(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)



写真18 須恵器(平瓶、提瓶、坏蓋、坏身)

された状態で発見されました。石室中央部からも金銅装具の破片が見つかり、彫金により細かい模様が施されたものも出土しています(奥付写真)。4本のうちで、もっとも長い全長83.5cmの直刀は、卵を逆さまにした形の鐔つばが付いていました。

馬具はいずれも鉄製で、轡くつわ、締具しめぐなどが石室奥壁側で見つかりました。轡は、環状鏡板付轡かがみいたと呼ばれるタイプのものです(写真22)。

鉄鏃ぞくしんは、石室奥壁側などから37本が見つかりました(写真23)。鏃の刃のある鏃身部の形が長三角形になるもの、片刃状になるもの、鑿のみの先端のようになるものなど、鏃の形がバリエーションに富んでいます(写真22)。

金銅製の耳飾りである金環は、2点が出土しました。玉類は切子玉きりこだまが3点、白玉うすだまが71点出土しました(第11図)。切子玉は石室奥壁側のうち、東側壁寄りですとまって出土しました。3点のうち1点は小ぶりですが、いずれも水晶製で、六角柱状に成形されています。白玉は淡青色をしたガラス製のもので、直径が35~40mm、厚さ20~25mmほどの大きさのものが多く出土しました。中には直径85mm、厚さ55mmのやや大形のものもあり、側面に穴をあけようとした痕跡が2箇所認められます。これらの装身具は、被葬者が身につけていたものでしょうか。

このような品々を副葬され、天神山に手厚く埋葬された人物は、いったいどのような人物だったのか、大変興味深いところです。



写真19 直刀(小林ほか2001)(玉川文化財研究所提供)



写真20 直刀ほか出土状態(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)



写真21 金銅装具出土状態(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)

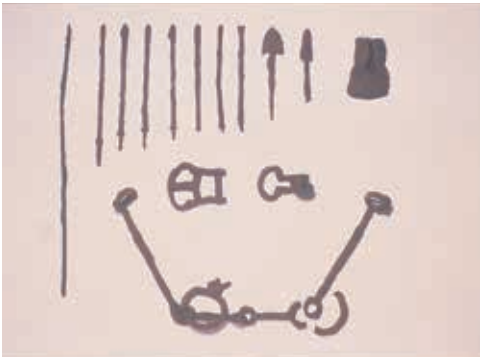
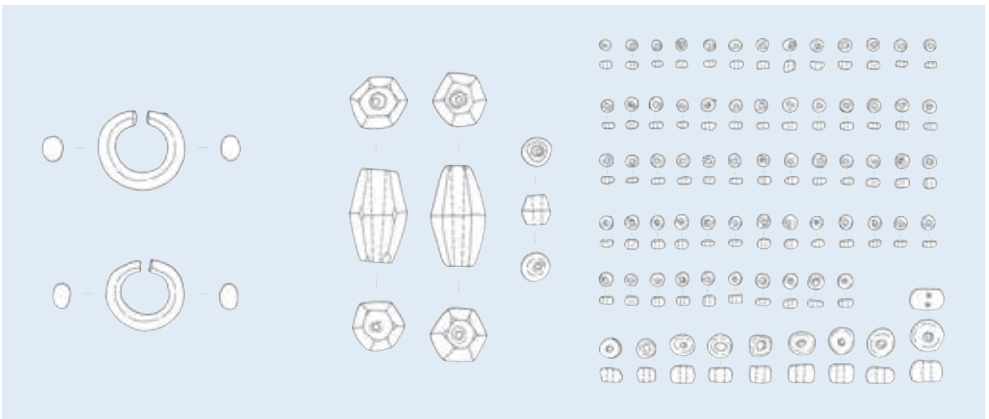


写真22 馬具・鉄鏃・鉄斧(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)



写真23 鉄鏃出土状態(小林ほか2001)  
(玉川文化財研究所提供)



第11図 装身具(金環2点・切子玉3点・白玉71点、1/2)

## IV 奈良・平安時代

### 1 大規模な溝と墨書土器

大宝元年(701)に施行された大宝令<sup>たいほうりょう</sup>により、国一郡一里(郷)という地方支配の仕組みが整えられました。天神山周辺は足下郡<sup>あしのしもぐん</sup>に属し、その中心は酒匂川左岸の千代台地<sup>あたまこやま</sup>にあったと考えられています。しかし、近年、小田原駅西口前の愛宕山遺跡<sup>あたごやま</sup>第Ⅱ地点で、掘立柱建物跡3棟が整然と並んで検出され、地方の公的な性格をもった施設の可能性が指摘され、注目されました。

天神山周辺では、御組長屋遺跡で溝や土坑が検出されている程度で、奈良・平安時代の遺構・遺物は多くありません。この時期の注目される遺構としては、天神山東側の低地部、現在の三の丸小学校の場所の小田原城三の丸藩校集成館跡<sup>はんこうしゅうせいかん</sup>第Ⅰ・Ⅲ地点で調査された、東西方向に走る大型の溝があります(写真24)。溝は全長78.3mで、さらに東西に続いていました。溝の幅は最大4.5m、深さは確認された面から最大1.63mありました。溝の中からは、8世紀後半～9世紀後半の土師器や須恵器がまとまって出土しました(写真25)。

出土した土師器の中には、土器の底の部分に「高禾」、側面に「木」と墨書された坏がありました。このように墨で文字などが書かれた土器は墨書土器<sup>ぼくしょ</sup>と呼ばれます。文字は神仏や他の人びとに何か伝えるために書かれたもの、習書<sup>しゅうしょ</sup>や落書きなども含まれます。文字は一、二文字書かれることがほとんどで、それだけでは意味が不明なものも多数あります。

天神山周辺では、御組長屋遺跡第Ⅱ地点の土坑からも、9世紀中頃の土器の表裏両面に「雁馬」?と書かれた墨書土器が見つかっています(写真26)。



写真24 大型の溝(小林2001)  
(玉川文化財研究所提供)

文字の広がりや、仏教の浸透などに伴う信仰や儀式の普及と関わりがあるとされており、9世紀頃には、天神山周辺にも仏教文化の広まりがあったといえるでしょう。

藩校集成館で検出された溝は、規模や墨書土器が出土する性格から、有力者の館<sup>やかた</sup>や寺院などの施設に関連する溝、あるいは主要道路に関連する遺構と推定されています。計画的に造られた溝と考えられますが、溝の西側は、直線的に延びると天神山へ突き当たるため、どこかで角度を変えるか、終結していることが推定されます。今後の調査で溝の続きが発見されることが期待されます。

大溝の南側に位置する藩校集成館跡第Ⅳ地点では、平安時代の柱穴1基が検出されています。柱穴内からは、鉄製のU字鋤先<sup>すきざき</sup>が出土しました(写真27)。

鋤先の出土例は、神奈川県内でも50点程度と限定的です。鉄製品は再利用されてしまうことに加え、鋤先などの大型鉄製農具は、首長クラスといった有力者の管理下に置かれていた可能性も考えられます。

藩校集成館の鋤先は、地鎮<sup>じちん</sup>などの祭祀に伴い、柱穴内に意図的に埋納された可能性も考えられます。



写真25 溝出土の坏



写真26 墨書土器「雁馬カ」



写真27 鉄製鋤先出土状態(小林2001)  
(玉川文化財研究所提供)

# V 中世以降の歩み

## 1 歴史の舞台としての天神山

最後に天神山周辺の中世以降の歩みを簡単にみていきましょう。

天神山周辺の中・近世の遺跡の調査は、主に御組長屋遺跡で大きな成果が上がっています。鎌倉時代～室町時代にあたる中世前期の遺構は、第Ⅱ地点において、13世紀後半以降のものとして推定される井戸が検出され、中国産龍泉窯青磁連弁文碗りゅうせんようせい し、れんべんもんわんや古瀬戸灰釉かうへい し瓶子などが見つかっています。中世前期にさかのぼる遺構は小田原でも少なく、小田原宿の成立を考える上でも大変重要です。

中世後半の戦国時代では、より多くの遺構が検出されています。第Ⅲ・Ⅳ地点では、土坑墓や集石墓が多く作られ、埋葬地として利用されたことが明らかになっています(写真28)。墓壙ぼこうの中からは人骨の他に副葬品として納められた銭貨せんかが多く



写真28 土坑墓群(小林ほか2001)(玉川文化財研究所提供)

出土しています。銭貨は、仏教における三途さんずの川の渡船料として副葬された六道銭ろくどうせんであると推定されます。戦国期の墓地のまとまった規模での発見は、小田原でも初めてのことで、貴重な成果となりました。

天神山南側には、小田原北条氏が天正13～17年(1585～89)に構築したとされる小田原城三の丸新堀が自然地形を巧みに活かし、丘陵を縁取るように走行しています。小田原城三の丸新堀第Ⅵ地点では、実際に堀が検出されています。堀の構造は障子堀で、調査区内でL字状に堀が折れ曲がることが確認されています。堀がクランクした構造は江戸時代の『相模国小田原城絵図』(「正保図」)しょうほうずにも描かれており、出入り口である虎口こぐちを構成していたと推定されています。

## 2 近世小田原における防衛の要所

江戸時代の天神山周辺では小田原城の西側の門(板橋口)を守備するために、弓矢・鉄砲方足輕の屋敷が配置されました。18世紀前半の『小田原城図』(「天保図」)には、御組長屋の地名が初めて見られるほか、すでに17世紀後半の『田辺図』では足輕小屋の記載が確認されます。発掘調査ではそれを裏付ける遺構が確認されています。

御組長屋遺跡第Ⅰ～Ⅳ地点の調査では、足輕屋敷に関連する石組水路や石垣といった、屋敷を区画する構築物や掘立柱建物跡、井戸跡などが濃密に確認されています。出土する遺物は、当時量産された雑器類が多く、優品が出土する三の丸の家老屋敷と比較して経済的、文化的差異が反映されています(写真29)。



写真29 井戸跡出土の陶磁器

## 3 近代別荘地としての発展

明治時代になると小田原周辺では多くの政財界の有力者が別荘を建設し、発展していきます。天神山周辺は風光明媚な場所で、瓜生坂の名が残る瓜生外吉邸や山下汽船



写真30 清閑亭

創業者である山下亀三郎の対潮閣、貴族院副議長を務めた黒田長成の清閑亭など特に多くの別荘が建てられています。清閑亭の建物は、国の登録有形文化財として往時の姿を今に留めています(写真30)。敷地内には小田原城の堀や土塁も残り、市民の憩いの場となっています。



時代区分		主 な で き ご と	本書に登場する事柄		
旧石器時代		箱根火山の爆発的噴火		65000 年前	
	後期	細石刃が日本列島全体に広まる	神子柴型石器	15000 年前	
	草創期	土器・石鏃の使用が始まる			
	早期	定住化の進行 気候温暖化による海面上昇（縄文海進）			
	縄文時代	前期	羽根尾貝塚がつくられる		
		中期	東日本で環状集落がつくられる 久野一本松遺跡の環状集落	五領ヶ台式土器 石囲炉の普及	5500 年前
		後期	祭祀具の発達	柄鏡形(敷石)住居 砂利敷住居跡、石垣状積石	4500 年前
晩期					
弥生時代	前期	水稻耕作の本格的な開始			
	中期	中里遺跡の出現			
	後期	奴国王、後漢光武帝より金印を受ける	住居と台付甕の出土	57	
古墳時代	前期	前方後円墳の築造開始			
	中期	仏教伝来		538	
	後期	久野古墳群 大化の改新 千代寺院跡が造営される	天神山 1 号墳	645	
古代	飛鳥時代	大化の改新 千代寺院跡が造営される		710	
	奈良時代	平城京へ遷都		794	
中世	平安時代	平安京へ遷都	藩校集成館跡の大溝 墨書土器の出土	1192	
	鎌倉時代	源頼朝が征夷大將軍に任じられる			
	南北朝時代				
	室町時代				
近世	安土桃山時代	小田原城が築城される 小田原城総構の造営 豊臣秀吉の小田原攻め 江戸幕府が開かれる	御組長屋遺跡の墓域 三の丸新堀	1590	
	江戸時代	富士山宝永の大噴火 ペリー来航	足軽小屋	1707 1853	
近・現代	明治	明治改元、五箇条の誓文の公布		1868	
	大正		清閑亭		
	昭和	太平洋戦争終結		1945	

## 文 献

本書を作成するにあたり、引用または参考にした主な文献を掲載しました。さらに詳しく知りたい方は、参考にしてください。

- 岡本孝之 2014 「大森と弥生－文化関係論の展望－」『久ヶ原・弥生町期の現在－相模湾／東京湾の弥生後期の様相－』西相模考古学研究会記念シンポジウム資料集、西相模考古学研究会
- 小田原市編 1995 『小田原市史』資料編 原始古代中世 I
- 小田原市編 2001 『小田原市史』別編 自然
- 小田原市教育委員会編 2001 『小田原の文化財』
- 小田原天神山遺跡発掘調査団編 1988 『小田原天神山遺跡』
- 香川達郎 2005 『御組長屋遺跡第V地点』発掘調査報告書、玉川文化財研究所
- 小林義典 2001 『小田原城三の丸藩校集成館跡第Ⅲ・Ⅳ地点』小田原市文化財調査報告書第100集、三の丸小学校内遺跡発掘調査団
- 小林義典 2003 『小田原城三の丸・城下 城下日向屋敷跡第Ⅰ地点 三の丸元蔵堀第Ⅱ地点 三の丸元蔵跡第Ⅱ・Ⅲ地点 三の丸幸田口跡第Ⅰ・Ⅳ地点 三の丸東堀第Ⅲ地点 三の丸大久保雅楽介邸跡第Ⅳ地点 三の丸大久保弥六郎邸跡第Ⅱ地点 三の丸新堀第Ⅵ地点』小田原市文化財調査報告書第110集、玉川文化財研究所
- 小林義典ほか 2001 『御組長屋遺跡第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ地点』発掘調査報告書、玉川文化財研究所
- 諏訪間順ほか 1994 『天神山台遺跡』小田原市文化財調査報告書第50集、小田原市教育委員会
- 田中琢・佐原真編 2002 『日本考古学事典』三省堂
- 山本暉久 2000 『柄鏡形(敷石)住居跡と縄文社会』六一書房

小田原の遺跡探訪シリーズ9

### 天神山周辺の原始・古代の遺跡

平成26年3月10日 印刷

平成26年3月20日 発行

編集 小田原市教育委員会

発行 〒250-8555 小田原市荻窪300番地

電話 0465-33-1715

<http://www.city.odawara.kanagawa.jp>

E-mail: [bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp](mailto:bunkazai@city.odawara.kanagawa.jp)

印刷 (有)石橋印刷

